

三
志の
法本
教付
心
念

13
3306
3



へ 18
3305
巻 3



繪本歌討者女傳卷之三

目錄

二女雅と道ろ、幸

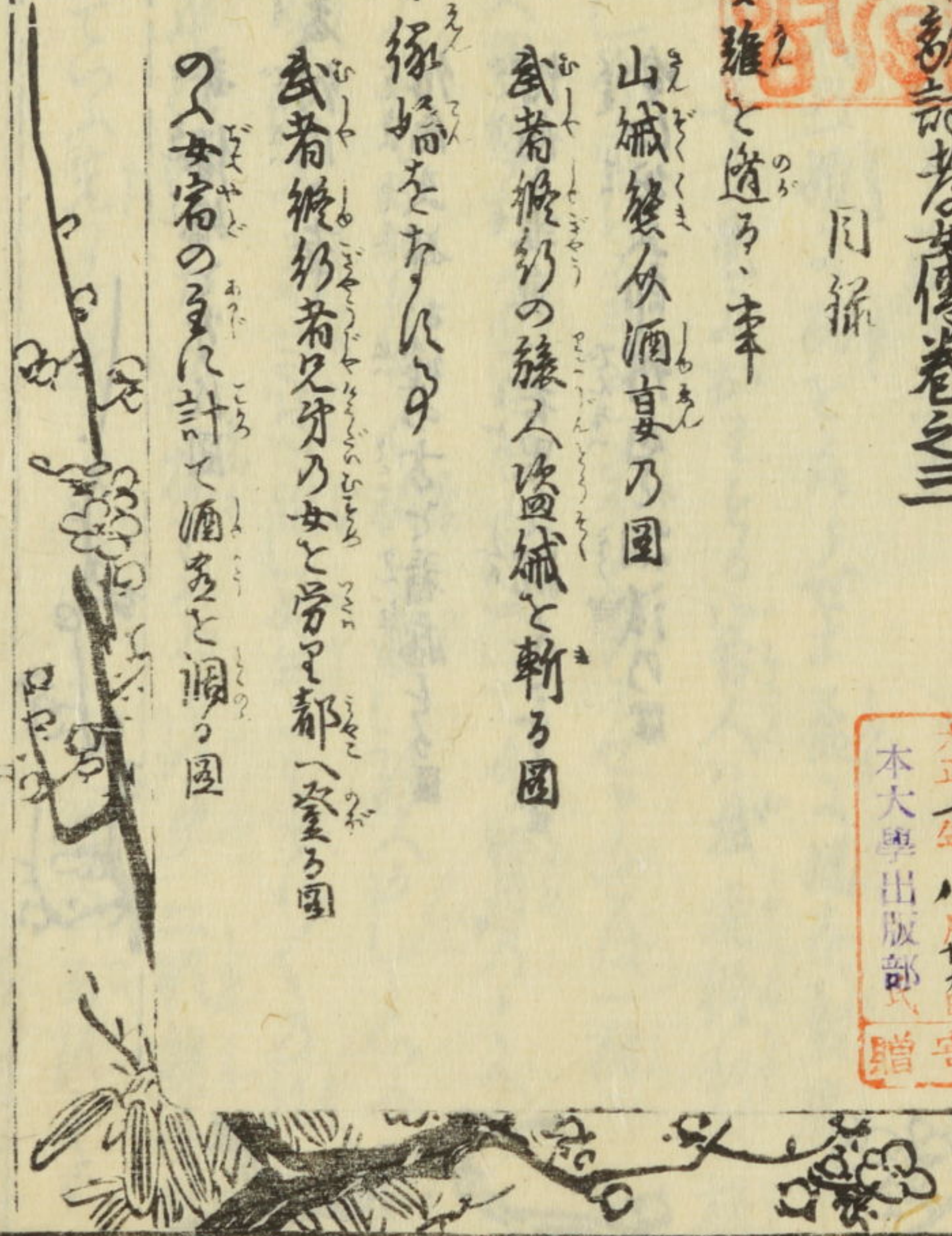
山城婆女酒宴乃圖

武者娘の縁人盜賊と斬る圖

壽嫁姑をたふしり

武者娘の兄弟乃女と旁里都へ参る圖

の女宿のまに計て酒多と調る圖



大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

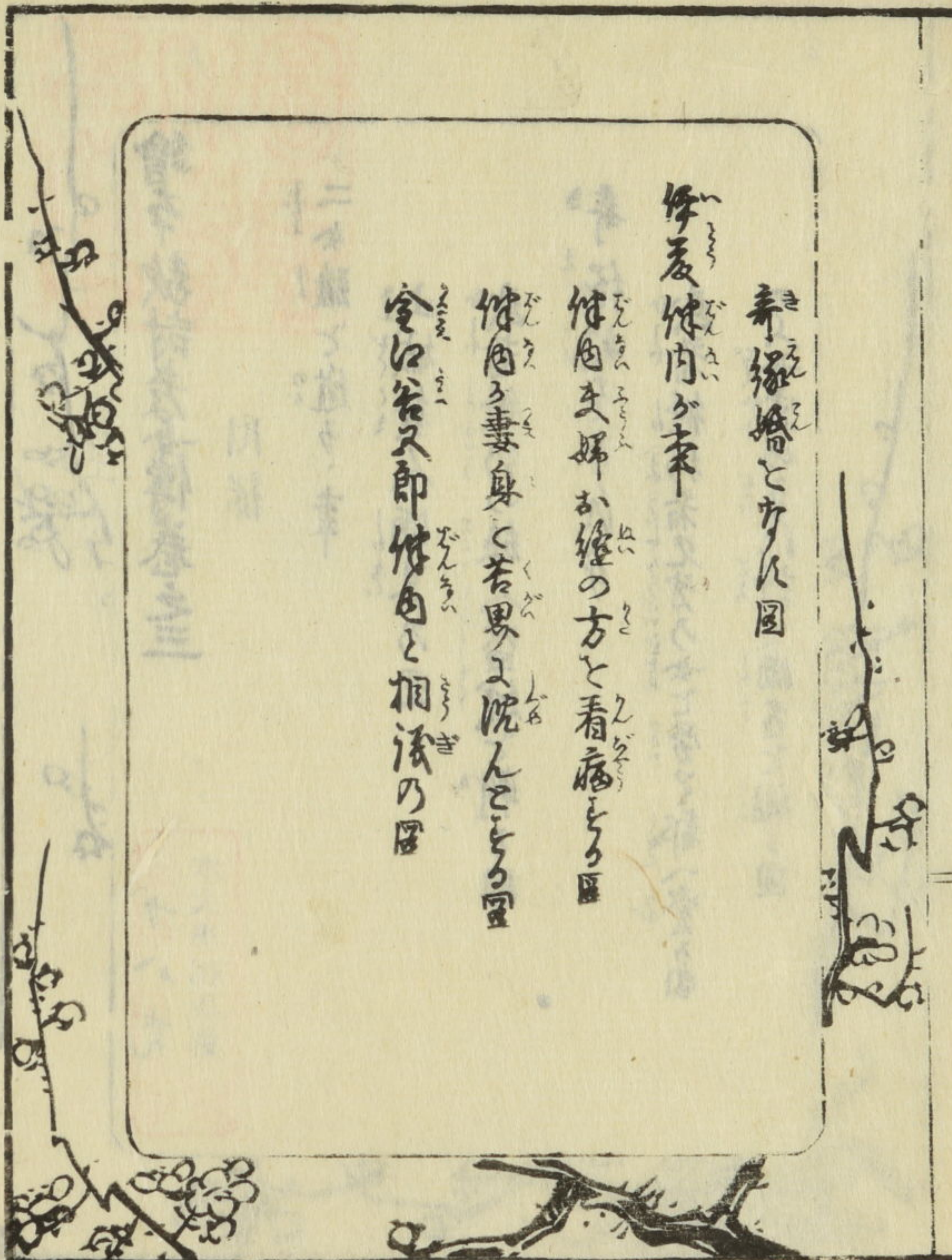
弄縁婚と方ん圖

修及体内が来

修及体内が来

修及体内が来

修及体内が来



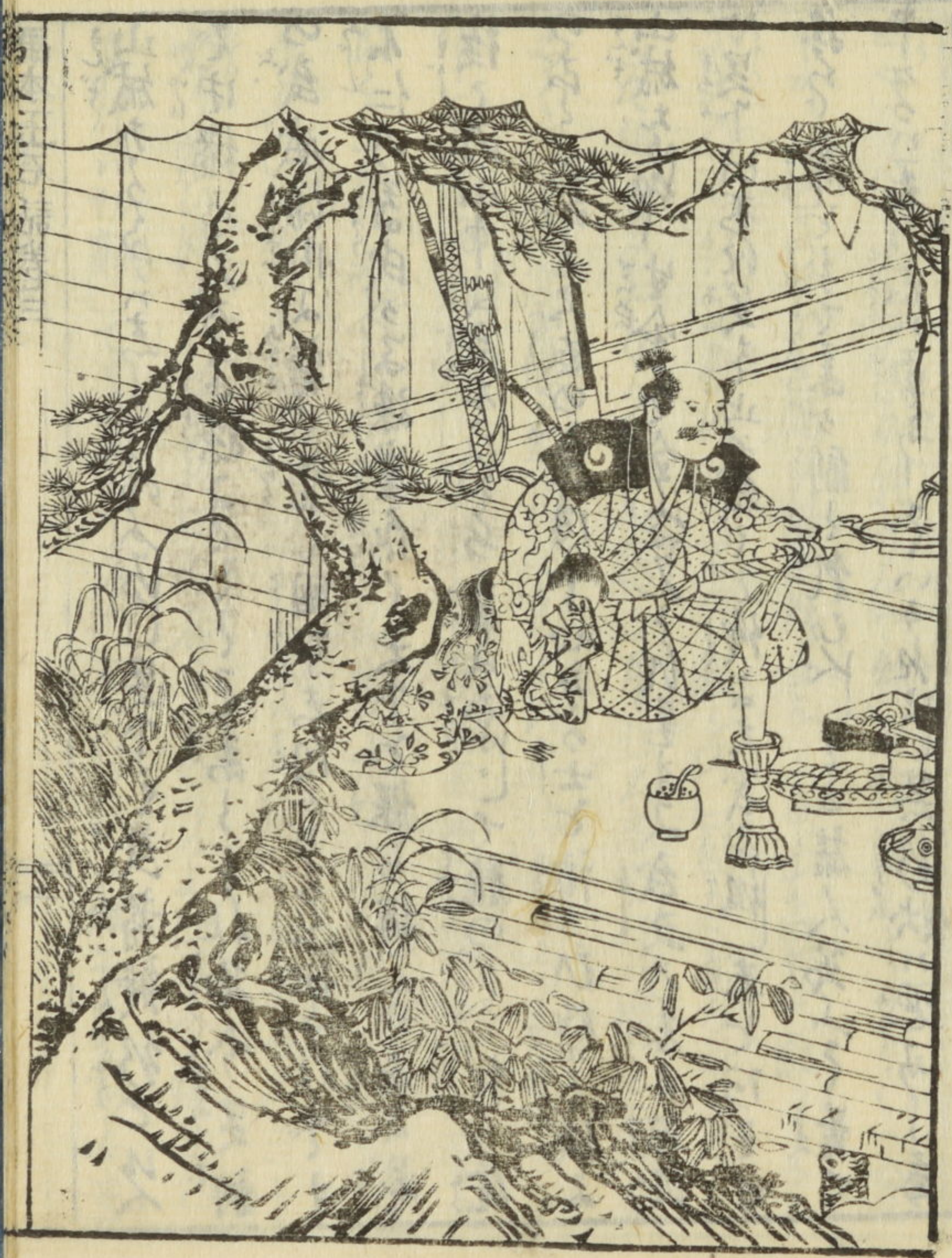
繪本歌討者集傳卷之三

二女雅を道る事

然めり二人乃娘とめと多し世と悪し酒を愛属下
の城等より中う是みおまるとる客人の武者修及の族
人方りはし今宵の宴は一宿と明させやせば一樹の産
の宿り又因縁によりりともはして今宵乃一人おれ
酒宴饒人より心おれちく碑と盡し終人しとつるは彼
饒人其厚情乃系き世と附し如城よりそれく乃れ我
をいぬ 應んはしちりて杯とめが流る二眼饒女饒
人より向ひていふ先より我々が風情をいぬ終人か云はし

繪本歌討者集傳

山絨笹助
酒宴の
圖



山城方くつりて志をせ給ふに「天下に武者絶つて久
 む中緒の人の子孫こそと見え来りし抑今も是利
 の武威海内は普く暫く國中志向うかろふに似れんや
 不仁なる氏か子孫豈永く天下を保ら得んや或は我
 後こそ乃山中又身をいそむ義なき事にして龍のどく
 のまぐらひを編ん大志のむかひ心ちかた士と信ず
 山城を以て生命を全せんといはれども又或は志は
 や下下け不仁を止め我くは修め大義の組と志と
 終る席とて系が副とれむ」と云はれ人等よく善て
 やつらひ君乃志の勇なりといはれは其の妙法の要あり

凶といふぞ大志を成就せんや斬る強盗も止む
 且可く色は抄かき酒は私に婦女を奪ひて怒り
 夫まの不仁は悲に強き者の報とて弱き者の
 こそ強勇の士なり我も密に屋に大志あり
 志は同志の真像を誇るまんとはれは今も
 一ニ女を旧郷へ送りしは彼唐土の抛園に盟を
 おく義と唱へて計らふは又止む御等と志と
 うとて就らばん席と破る糸の志とて
 嘲り笑ひぬる心せまれば田舎者こそ
 て何んか切敷して奪ひとりてそれ代に我も
 止む



武者能初の
縁人盗賊を
斬る國

仕をせよ何乃あやきりや殺して奪り盗むなり
 せよし盗む者盗む者先よ止るなり切えしと人
 といふはあけけけの旅人眼を見開き然助をいひて白
 眼盗むにも義ありあふふも又不義なり不道不義の盗
 をおひ然後我乃切味を減んと殺とら々然めえよぬは
 何者の者なり我えよて大と吐や属下の者とも集ち
 殺して夜敷を刺やとト知とれい垂居る緋多むらうくや
 三考る本と旅人心得刀の柄よもぬけしと見る後先
 とく緋二人扱ち又切割し余り又先向ふへり後と修
 する燈臺と二ツよこそ切割しけ勢いよ怒きをぬ緋

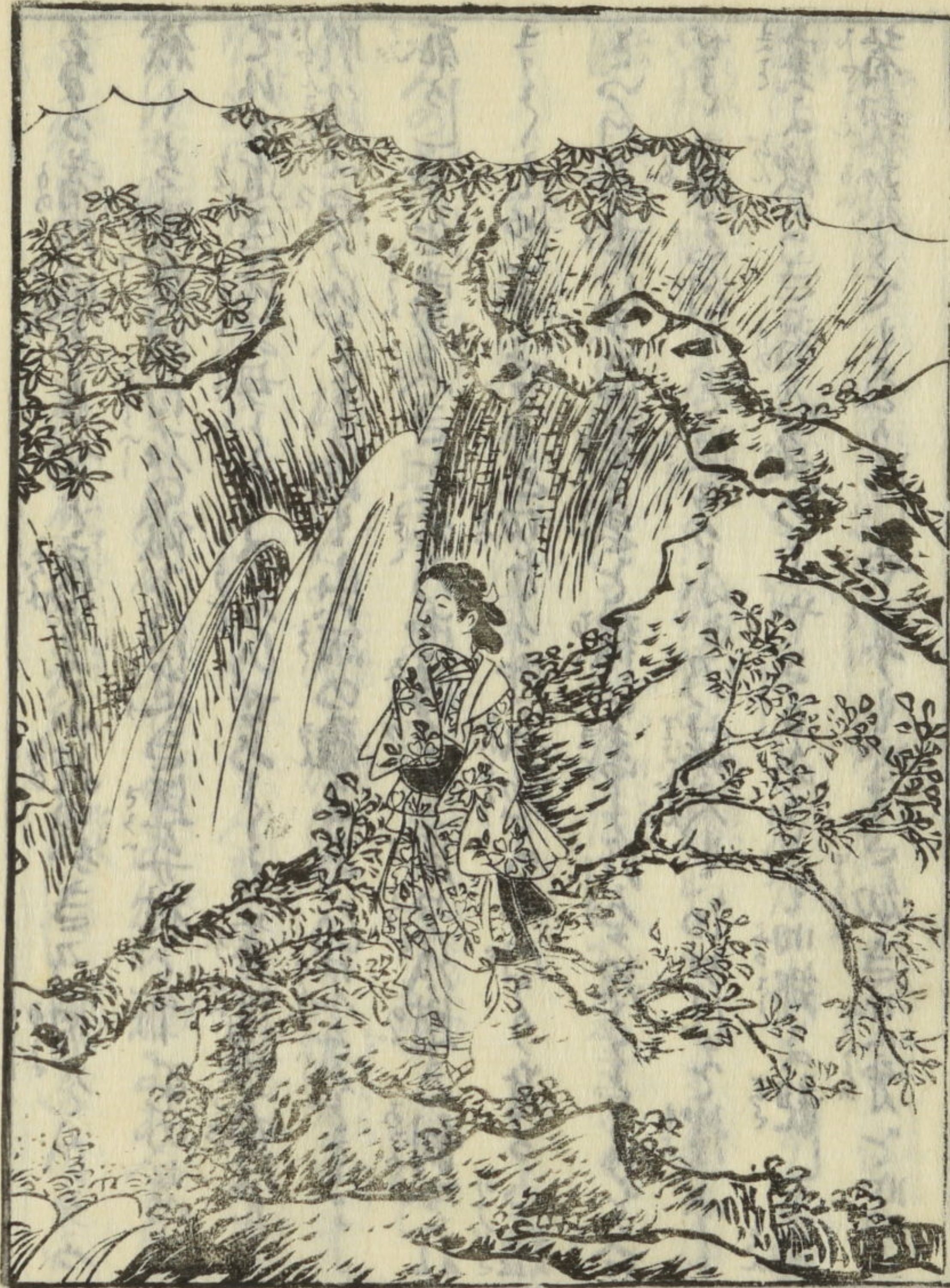
首然ぬるまほじと迎せば下乃者とも我先よと崩
 と出殊の子をらうにぶとく新方なりぞ迎えたり旅人兩
 人乃娘又向いしはゆしと修ふるゆらうと新をた方へ送る
 屋けきんをばしとちいぞおき乃おのぶがうとさた人ん
 と物ばし今け難ととらひ終へる我おの神佛とてま
 まんをや再び緋乃来り取回し何方へも出させ終人と地海
 くとうらうとあつ小旅人知なく鳴る又思ふぬ盗賊系
 何人集り来るとも悉く殺し捨なき小心とて門の扉をさ
 けし屋へ酒食を喰ひ腹とてしとくおとてとてとら
 たり終る乃美味難子乃焼る銚の湖葉令華山のりり

と秋田の平瀧女は食せ我も食し儂もみたる所令一衣衣治
用にせよと二人はよへいさゆべしと足牙がもとりて菴
の内は三世が存るよの城後の伏勢ももうらまはばと山
源き樵夫のふれ踏まけく武義治さして急ぎたる

考縁婚をさる事

二人の若女と若心と助けらる下徳國を誘引とまじりこ
そるるとうか乃縁入二人の若女向ひ中なるは汝等兄弟
順礼の体よ見入ぬるがし具とる人も方く後及と恐
まはる膽ちるふるまひ友芝のてく山城の難よあへり是
より若先と心と相ひ不意の若いと恐るし叔もいひをい

る者乃娘方りやと見らるふ娘のおき乃相をうらや
我も陰奥國白石の城に近き逢井村と平石の若女
ていが近き比父母ともよまひせめくも善提のふはり
順礼よゆういさるる流し山城の難よあひらんかともい
恥しめを夢るべきと若乃所膝をて床に臥遊さ割へん
まもくもゆへにせよと切ちる所衣抱よあぶりなるる難
とい乃世にうけ受懸と報ひ事し流るるをいとくも合
せく露まのくくと後なるふか乃縁入しわかれを傳へ
実よ候るべき者乃乃の上やさるめくも旧郷を觀しき縁
者親れとせしるるしや事しいまも勿き足牙と心つよ



武者能行者

二女をいさる

都へ登る

国



くまもろくぐと呪礼回國よまきくも見放し出はりよ
 と云又娘いよくはし志州と云又河と云うりしが山程
 より乃海と云ぐも信ある人と見たるこ先を山城と斬
 殺しける勇壮はわれう教ふみ助古刀を斬るよの候
 卒居りて遠と云しとく婦のおき乃泪を母と云ふ言さか候
 にい人希くせ二ツ乃形ひのいばてはまきことと云せよ足
 う又の逢舟村の百姓と云候作と云者そり今と云南
 朝乃忠臣楠廷尉儀のは故を其内と云い武士附代
 はきてく世辰ま乃いと云くまき人無きよと云しよまき五
 月乃中旬白石の侍志賀其臺七うみ小眾のいして討と母と

手き痛乃藤父の義船よみ力労とこれと墓なりぬり
 ていされども其臺七白石表乃首尾けり能地を退放の所
 くにあとも知信者はしもうい兄乃武士乃娘として候
 又天を裁ざり父の歎を候よあてきうと此世私よ
 合せ旧郷よの親しき物父乃いれどもかきとくこまきい出
 てい歎臺七と云りよ大か大兵初初飛孫の勇まうと云は
 ういりた女まう人のふとて討をた者けり福と清た
 其臺七がもにけりけりきうれ女乃やをを五と一石に
 三ツ瀬の川を流りよき誰を斬たよりまらけまき都
 と心出よとまきい出つるよきいありれ慈悲乃所心と云て

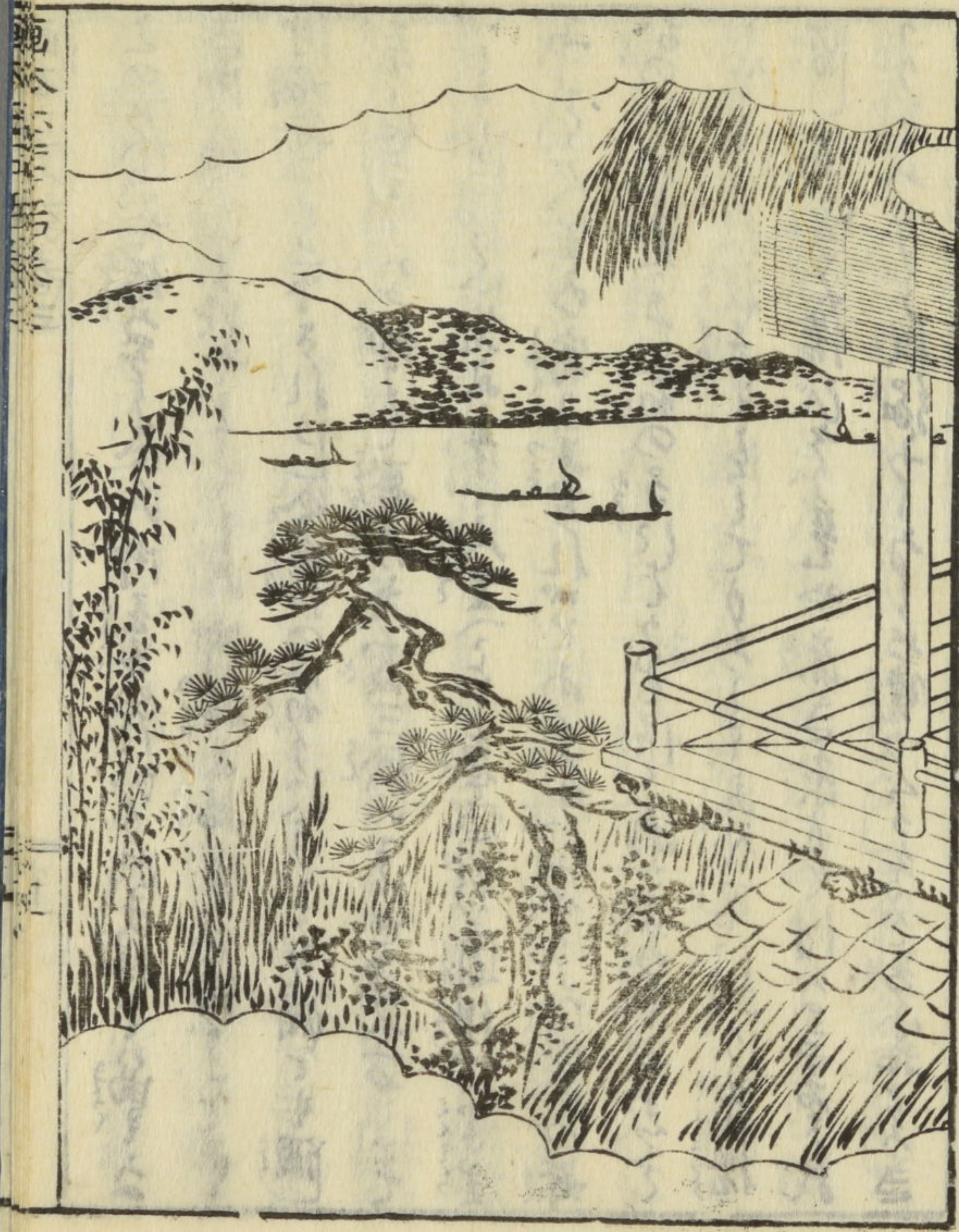


のふ女^{やと}宿^の
いま^にま^つつて
酒^をま^つる
この^よち^の国^が



力もゆるみ乃の執を教せさせ給ひるは足身が終りの命と
 りのくみが一乃の御意とを教ひ給へせやとて語り終りて
 兩人も去にひき返し居居る族人多く大きに驚き且感
 といさだよき女とてあつるよさてい女もが又といふ南無の
 信長板を基内といひ者よ来日後醍醐天皇の功は名
 和長壽が后金に勸ま傍が二子若又即といふ者なり我
 大をみく國とてあつる者なりと義を刀をくせうはいと
 とは女もが力とあり教志賀其七を尋出 助を力
 て狭く討とていざいぬふりあつるいとさといは
 くらにぞ二人の娘は晴夜は月の出たる心地只ひとあはし

拜むより外は道に 洞み河のさうにわづらふる若又即をて
 婦のなき乃よいひ我助を力して女が歌を討せんよ酒を
 てい世れ人にも防ぎごとし我を是とよまかりりまにまよふ
 いぢう者よりいひ給ふと女もが本屋と違ふといひ
 ま婦乃睡ひをおどし首尾よく歌を討る後ハ改め
 離別せんよ其の御女が心よ但せ実乃まを定むと九
 といくち助を力りぬとていふまき乃はてすよ余り
 といふまき御女が心よけ終りり乃不肖なりをさうり
 くらとていふと得いぬは只いふたははし君乃心
 但せ人といふまき御女が心よけ終りり乃不肖なりをさうり



Red seal impression at the bottom center of the left page.



日本石話卷三

壽之
督之
國之

十

上のいづきや保ちて今乃河云云にわたりたまはれと曲り
 き御侍のいづきやとくも乃御侍と歸上乃修りをも
 御侍せしむ下されし今齊の宿りたうとた酒と酒
 事せまういづきと事乃九夜三献いそせ後人方こそ
 けり道にけ小先女まゝ人里へこそ急ぎ多道後よす里
 あり人里の宿も若たれどある家に宿りて需め妹
 かのぶが若たして宿のまにとうまはく酒も若たして
 め心むうけ祝まじとてのちもみ外へ入りて枕
 留しむるを借びたり是や赤き糸のけりきまされ
 うりそめちりぬ縁やうりめ曉つらるるが事小押とんき

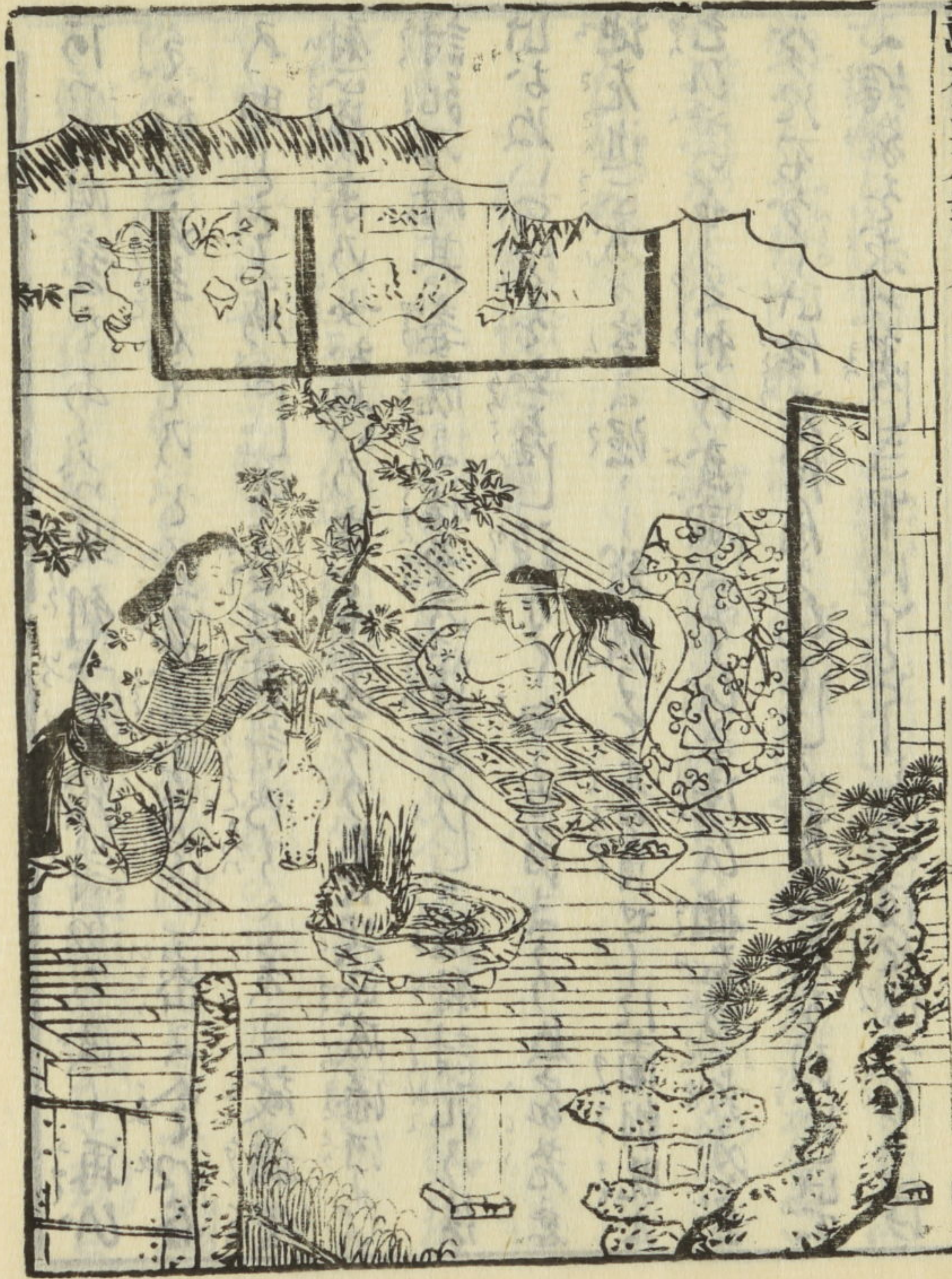
谷又郎二人乃娘もぶびのよそりのは「たふふ谷又郎ヤ
 中々の今汝はといさういさ都乃方へよりうりとも款
 の在るをれど急は急は事急をとげけし」其上我ら
 團とせめぐれ大志は女を引つて團やぐりせんも
 たうひ乃くありうし「うまじ」出團相馬郡後河と云
 ちの修者侍向とく人浪人ありも我ら合に勤ま清く明茶
 しく信義我ら勇ましく我が家と送り居け侍向は海
 が都へよりる乃復をれとらんよあふくも藤原のき義
 我はれた母のこりれが先導が紅にせらる我はまうり團
 を吹圓一奉奉七月二星浪はを渡る乃吹るらり京都

て事今に及し「まきまき」は歌のまねのり「まきまき」のまきまき
実やくおむす「我も臺七」は石原権兵衛の求む付次牙急い
で上系を「たむし」しく物本園き金に若く即福徳の地へい
かひゆぬ

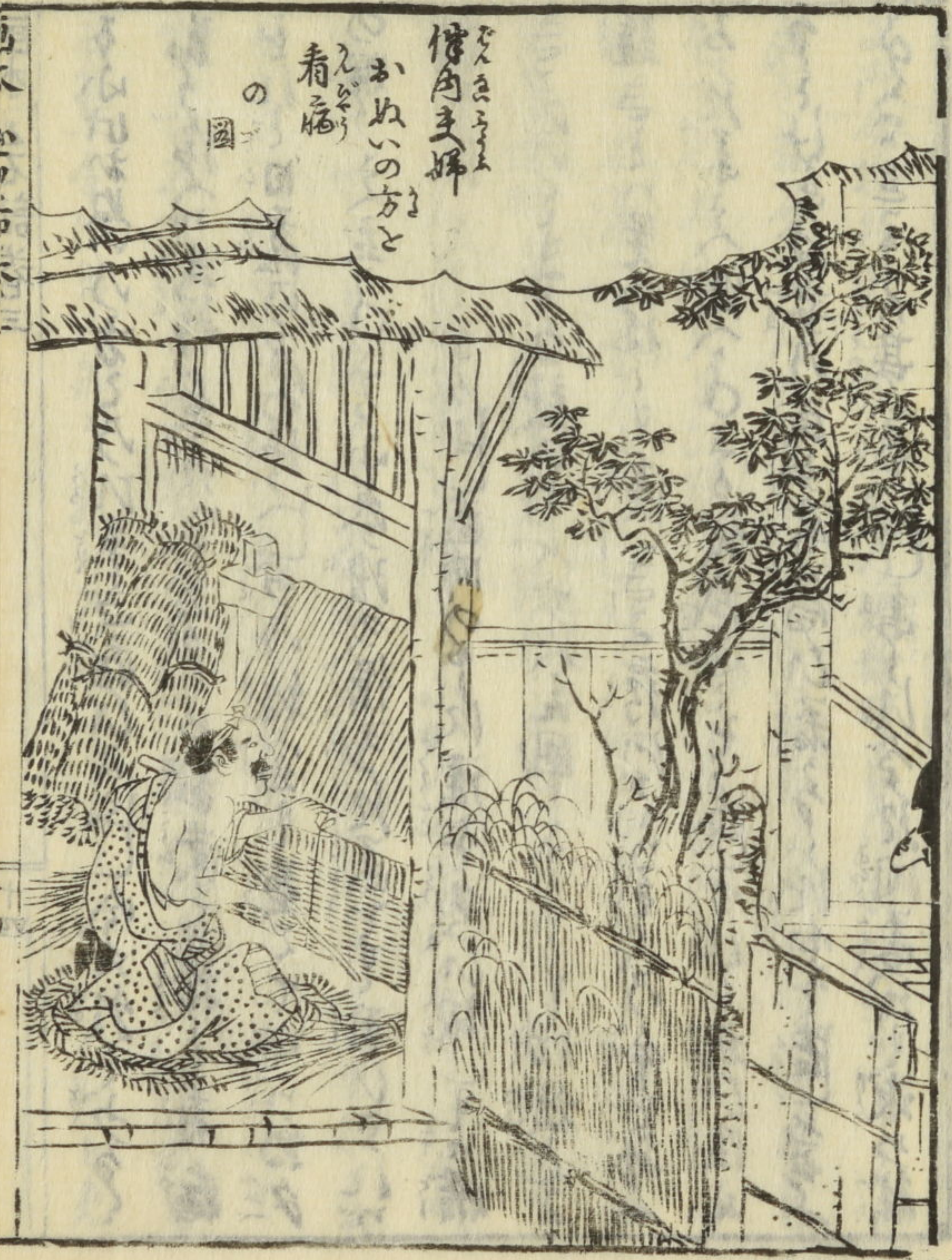
伴後伴肉が幸

相馬郡福徳の町は伴後伴肉といふ浪人、捕家の後
様につまみし「急地」に逃がれ居ておろくまへき縁より
やみぐみ肉の女官は「終り」とり終りまはりの活しひとめ、妻
の名も氏もいづれともろの欄りとま世と後るよとぶい、建
を織く業とけり「終り」きま中にも南朝の滅とて歎き

阿の道時後とあつば足利一家の討つる後、再び
を家と名をいふと「終り」を「密」に金に谷
又即とて「終り」を合せ其計ありて、又故捕廷
尉「終り」末の女おぬいの方と申す、是れ「終り」
討死乃時其妻「終り」懐妊乃心地方りし、延尉討死乃後
いおぬいの方を「終り」終りて母を「終り」まよりぬ家老「終り」
地「終り」道に「終り」室に「終り」我「終り」終りて「終り」南朝「終り」
を「終り」中「終り」足利の「終り」威に「終り」か「終り」捕家の「終り」一「終り」
を「終り」終りて「終り」伴後伴肉といふ「終り」か「終り」ぬ「終り」
又「終り」家「終り」を「終り」求「終り」ぬ「終り」ま「終り」中「終り」に「終り」
「終り」は「終り」終りて「終り」は「終り」終りて「終り」



僧角ま婦
おぬいの方と
看病
の
園



るふけおぬい乃方この以事き痛ひよはし今んれそ少く
 ぬり婦人が主婦昼夜心をくくち家業を捨て看病
 とんど日産の刃の槍し少乃材室日盡て今乃夕
 の烟うえまよひころふ参詣の價るた糸より用いざしが
 痛を治さううらよはし医師の中に議をたひぬし口惜
 きまのそまうの款の十人女人を團まううと切後人よ
 難きといえ人海より復きよ病にといる人乃命と敵入
 ぶた糸入調人よこの我武運とそうはしたれと悲ひ後
 ちよはしは妻乃氏女まよひるるるんを治しちあふ
 りよふとまうの其令と調し高しんた回道なり求む能

又沖女抱持し今種倉乃傾城町を名とらふた不(ま)うう
 りよを若(あ)みよま(あ)けり糸乃價ちよ容易うと(ま)うふ(あ)れ
 を(あ)く(ま)よ(ま)う(ま)び(あ)う(ま)れ(あ)志(あ)う(ま)我(あ)何(あ)を(あ)う(あ)は(ま)ん
 我(あ)よ(あ)忠(あ)義(あ)を(あ)全(あ)く(あ)盡(あ)し(あ)ひ(あ)の(あ)汝(あ)が(あ)力(あ)が(あ)う(あ)く(あ)ま(あ)又(あ)種
 倉(あ)の(あ)傾(あ)城(あ)町(あ)を(あ)せ(あ)屋(あ)ぐ(あ)え(あ)強(あ)り(あ)ま(あ)と(あ)う(あ)の(あ)我(あ)も(あ)又(あ)ゆ(あ)り
 妻(あ)し(あ)り(あ)う(あ)も(あ)よ(あ)来(あ)と(あ)議(あ)と(あ)ら(あ)ふ(あ)の(あ)女(あ)房(あ)の(あ)若(あ)婦(あ)内(あ)裏(あ)
 宮(あ)は(あ)せ(あ)上(あ)層(あ)の(あ)れ(あ)が(あ)英(あ)同(あ)宮(あ)親(あ)血(あ)と(あ)の(あ)ま(あ)乃(あ)の(あ)ま(あ)や(あ)る(あ)
 り(あ)ふ(あ)た(あ)の(あ)百(あ)大(あ)は(あ)眩(あ)ひ(あ)ま(あ)い(あ)少(あ)し(あ)を(あ)治(あ)う(あ)を(あ)こ(あ)ぬ(あ)き(あ)し(あ)
 黄(あ)金(あ)又(あ)十(あ)片(あ)を(あ)な(あ)て(あ)換(あ)ふ(あ)る(あ)は(あ)し(あ)既(あ)に(あ)相(あ)議(あ)決(あ)し(あ)る(あ)ん(あ)こと
 り(あ)を(あ)一(あ)令(あ)に(あ)若(あ)入(あ)即(あ)う(あ)れ(あ)り(あ)る(あ)も(あ)と(あ)う(あ)に(あ)二人(あ)乃(あ)む(あ)と(あ)死

日本書紀卷三

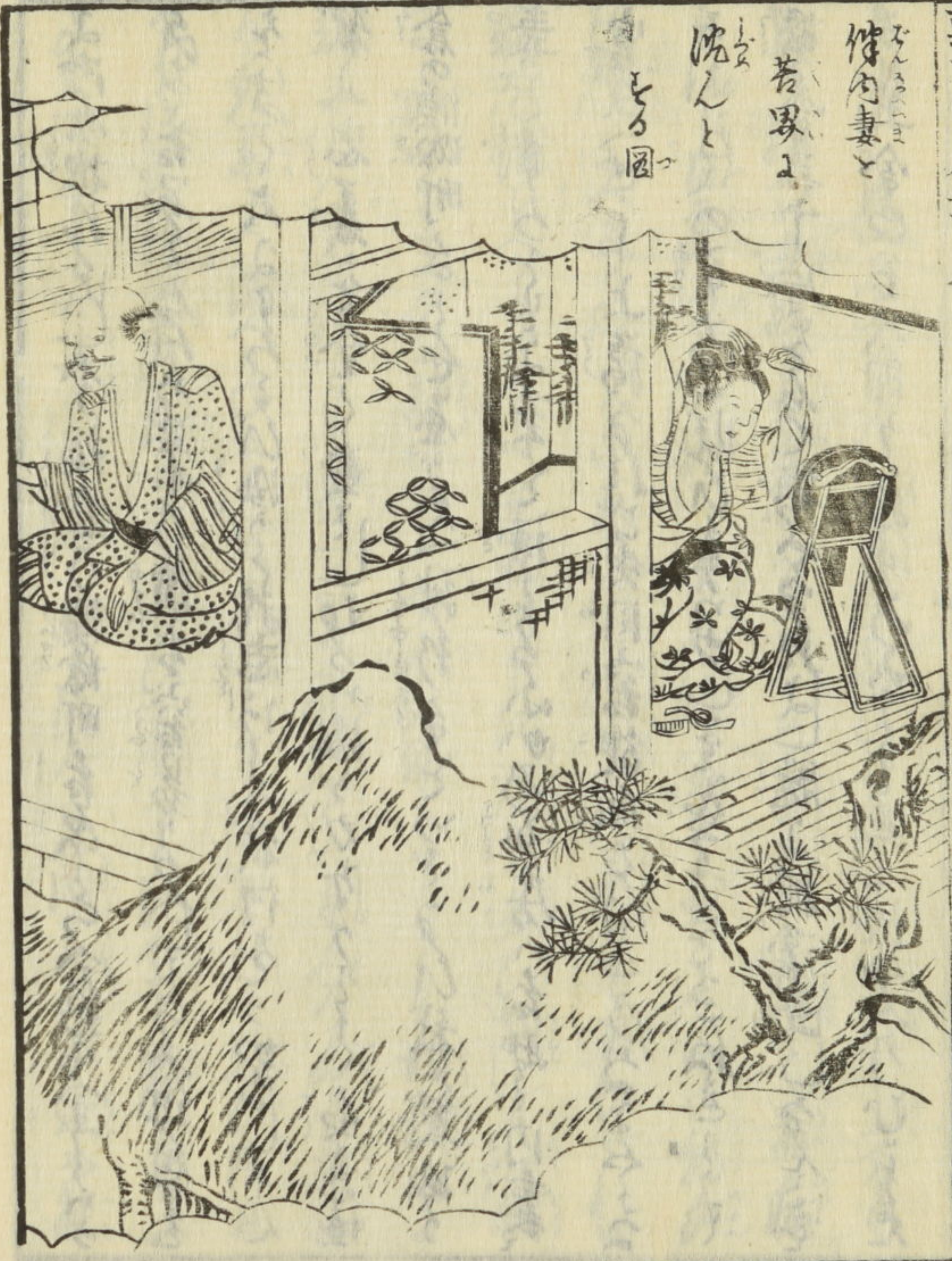
十四

伴月妻と

若男と

沈んと

とる園



さいごのいまり付内よあひく女が始終を把持り都の方
 まて興して移人やと余懐ちかくれとまゆふ小使也肩と
 ちまけけり時よりして郷乃れとに後じごと日乃本ま
 ぶ背く糸に情くまふと地乃人をれと移人じとまう
 谷又即席と進とく系がれとに後じ移らぬしりてま
 じり小使下乃生質義みよの記をまきまき奉に徳んぐ
 雅と悲さの勇士方り小今日のみとま何とやん心得雅
 一若幸りけり暇らふ若ばせ移人との小使也や中りま
 足下いままごまけぬい乃方けり手痛成ひ移人
 危きの日々あり系乃多うと看痴心は但だけけり

又妻女以方り者と極倉吉京町よ奉てを價を以て後く
 後とんんと今既よそ子潤ひぬ元来系が妻の吉野内
 希ははは身り朝廷乃官女楠氏の婢女よりけりまは
 今系が妻方りを以ておぬい乃方の御みふ系を大宛り
 志乃承く若以の勅めをるに統る小今足下乃れとみ
 後じり乃「き女子と情ひまき都の方」移人乃妻のま
 不日麻じく且主人乃腰痛を看者もこれにけり由人
 放て足下のれ移人よ後じごとと云谷又即席と使いて
 主婦が忠義と感謝「落洞」て行るうり」が妻乃を三の
 白ひてヤタのいぬがの捕家の居故を系といひ」者なけり



金江谷入耶
後流の町

日本玉石記卷三

十七

やまの病小外孫おぬいの方と愛へ孫ふの故楠判官心成
 云乃御長女侍色と申り忠地先道が御長子なり今おぬいの方
 のき病を救ひ給へりせんお小娘が身を委せてる家の為よ
 忠義を盡さい黄白水の卜ちる父母もさう嫉しと云いざらん
 其上花街へ諸國の士民寄集るなるれば男婦人乃を妬と
 もお知んをたたりみん心を定め身を委せて忠義と云
 ふと愛へればおき乃少しも穉もさるさう若く西向し孫ふ
 上も何れと申りあると申きさるやく彼を以て傾城の
 勅ともはしりまんよけ勝が方のところよりたよけひ孫は
 と云い色を妻押とててこれおひさうさ御許りいれと云を

云しぬ方乃我めよりき美樹の内よめをまのち孫を
 きり乃めえきや奉脱し調ふとい我こそ被るた好じと
 云よ右又即先と申えと云よ一ツ乃議論あり憎くこれを
 はせ給へと云吉原町の色八屋の奥の回へ退く女侍内
 孫二人の女を道く振れ用後みこそ乃びさう

繪中歌討者女傳卷之三終

